様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１３６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２５９０

研究課題名（和文）日本におけるギリシア演劇の受容と世界的発信に関する実証的総合研究

研究課題名（英文）Reception and Diffusion of the Japanese Performance of Ancient Greek Drama

研究代表者
野津　寛（Notsu, HIroshi）

信州大学・学術研究院人文科学系・教授

研究者番号：２０４０２０９２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：主に海外の研究協力者とのコラボレーションによって、近現代日本における古代ギリシア・ローマ演劇受容(翻訳、翻案、上演)の網羅的調査を行い、古代ギリシア・ローマ演劇受容に関する国際共同研究の欠落を補完すると共に、西洋における日本の伝統劇(能、歌舞伎等)の研究と受容が、西洋における古代ギリシア・ローマ演劇の研究と受容に与えた影響を明らかにした。また、わが国の古代ギリシア・ローマ演劇の研究と受容に関して、当初は相補的に行われた研究と上演がその後乖離するに至った原因を探究した。これらの研究目標に関して、国内及び海外において研究会を開催し、その成果を公にした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究には、研究・意見交換・報告・データーベース公開、研究成果の発信をあくまでも国際的な場で行ったという特徴がある。期間中に数々の国際的な研究会を開催すると共に、研究代表者と海外の著名研究者の共著論文の出版等を通じて、この研究の国際性が、我が国における古代ギリシア・ローマ演劇の研究と受容・上演を西洋におけるそれらと比較することによっても獲得された。この二重に国際的な比較研究によって、我が国の西洋古典学研究と受容・上演に存続する根本的な特徴と問題点を照射すると共に、我が国における古代ギリシア・ローマ演劇の研究と受容・上演が将来進むべき方向性をある程度示唆できたと考える。

研究成果の概要（英文）：In collaboration with researchers mainly from overseas, a comprehensive survey of the reception (translation, adaptation and performance) of ancient Greek and Roman theatre in modern and contemporary Japan was carried out to fill in the gaps in international joint research on the reception of ancient Greek and Roman theatre, and to clarify the impact of the study and reception of traditional Japanese theatre (No, Kabuki, etc.) in the West. Our study also clarified the influence of the reception of Japanese traditional theatre (No, Kabuki, etc.) in the West on the study and reception of ancient Greek and Roman theatre. It also explored the causes of the divergence between the research and performance of ancient Greek and Roman theatre in Japan and its reception in the West, which had initially been conducted in a complementary manner. Conferences were held in Japan and abroad on these research goals and the results were published.

研究分野：西洋古典学

キーワード：受容研究　ギリシア悲劇

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

文学史的研究と並び受容(後代に行われた伝承・研究・翻訳・翻案・上演)の実証的研究が古代ギリシア・ローマ演劇研究の不可欠の部分とみなされているが、西洋古典研究一般についても同様である。西洋古典作家と作品の文学史的研究とその受容の研究は相互に不可分であり、両者は表裏一体の関係にある。古代ギリシア・ローマ演劇の受容研究については、オックスフォード大学古典学部に属する APGRD (Archive of Performances of Greek and Roman Drama) が注目に値する。APGRD が推進する中心的な調査プログラムの一つに、古代ギリシア・ローマ演劇の上演データベースがあり、上演(受容)に関する世界規模のデータの集積が進行中である(その成果はネット上に公開されている。他方、近現代日本における古代ギリシア・ローマ演劇の受容は、我が国における近代化・西洋古典受容一般の重要部分として、すでに百年余りの歴史を有しており、独自の演劇伝統を有する東アジア漢字文化圏にあっては特異な文化現象となっている。とりわけ 1958~1970 年の「東京大学ギリシア悲劇研究会」の活動は注目に値する。また、蜷川幸雄氏、鈴木忠志氏、宮城聰氏等の活躍は、この特異な文化現象の一つの集大成として、国際的に高い評価を獲得した。同領域における我が国の動向が西洋人たちによっても 決して無視できないものとなっていることが理解される。

これら現代日本人による古代ギリシア・ローマ演劇上演活動の実態は、上記 APGRD のデータベースにもすでに登録されているか、あるいは直ちに登録されるであろう。しかし、これらは明治時代以降の近現代日本において実際に行われた数多くの古代ギリシア・ローマ演劇上演活動のほんの一部に過ぎない。実際、上記 APGRD のデータベースを閲覧する限り、日本における上演の実態については、情報の体系的かつ方法的な集積がほとんど進んでいないことが確認できる。その理由は言語にある。日本国内で日本語で上演される古代ギリシア・ローマ演劇については、その上演記録も基本的に日本語のみで公開され、西洋の研究者たちにとってはアクセスの困難な領域である。従って、我々は、日本人研究者として発信することによって、世界規模で行われている古代ギリシア演劇受容に関する国際的研究という研究領域において大きく貢献することが可能であると考えた。

本研究の研究代表である野津は主に古代ギリシア演劇の領域で、研究分担者である葛西は主に古代の弁論と法制史の領域で、研究分担者である納富は主に古代ギリシア哲学の領域で、研究分担者である吉川は主に寓話文学の領域で、それぞれ、西洋古典の文学史的研究と同時に受容の研究を進めてきた。我々は、西洋人による日本の伝統劇(主に「能」)の欧米への紹介と欧米における受容が、特に欧米における古代ギリシア・ローマ演劇受容に大きなインパクトを与えた時代があることを知った。そしてまた、E. F. Fenollosa, E. Pound 等の先駆者、多くの上演実践者と研究者の間の交流を経て、J. Gould 氏、O. Taplin 氏の努力により APGRD の設立と活動に至っていることを知るに至り、古代演劇の研究と受容・上演とが西洋においては密接に結びついていることに比べ、 この同じ領域において、日本では大きな乖離があることに着目した。その一方で、日本の伝統劇と欧米の古代演劇を繋ぐ役割を果たしたはずの Fenollosa に関して、日本でも欧米でも、仲介者以上には詳細に扱われていない現状が判明した。Fenollosa に関する問いは、Fenollosa 個人の見識のみならず、当時の欧米・日本における社会状況や演劇の在り方、古典教養の広まり、古典研究の実態など、先駆者 Fenollosa を生み出した背景にまで関わる問題である。我々は、改めて Fenollosa にまで立ち戻り、日本・欧米双方の観点から、より広い視座に立って議論を再構築する必要性を認識するに至った。

なお、古代ギリシア演劇(とくに悲劇)を、残存テクストの確定と解釈だけによって再構成し、理解・解釈するという方法に対する反省と批判は、一方で 19 世紀の人類学の発展によってもたらされた。儀礼と神話に焦点を当てた社会的・宗教的背景からギリシア悲劇を理解する研究は英国においては J. Harrison や G. Murray らによって始められたが、とりわけ E.R. Dodds, The Greeks and the Irrational 1951 (邦訳『ギリシア人と非理性』1972 年) 以来、ギリシア悲劇研究(あるいは広く西洋古典学全般)は人類学、心理学等の成果を批判的に取り入れることによって発展してきたと言ってよい。この発展の態様は欧米各国で異なるが、英国においては、Dodds から前述 Gould 氏に受け継がれた。Gould 氏は 1960 年代 初頭、日本の伝統演劇、とりわけ能の上演形態に強い関心を示しているが、それは同氏がハーヴァード大学付属ギリシア学研究所時代の久保正彰氏から影響を受けたという個人的関係にはとどまらない、英国(英語圏)における能受容研究の歴史的背景も考えられる。

本研究は、下に提示する研究目的 [1] については、明治 以降日本語で行われた古代ギリシア・ローマ演劇作品に関する研究、翻訳、翻案、上演の網羅的なリストを作成すると共に、この受容活動が、何時、何処で、誰によって、何のために、どのような方法で行われたかを明らかにすることを目的としている。受容研究の枠組みの中で演劇上演の実態調査を行うにあたり、単に上演者、上演題目、上演日時等のデータを列挙するだけでは不十分である。上演 実践者の言語的・教育的・思想的・職業的背景、演劇のスタイル、使用された台本の翻訳の種別と由来、観客の種別等を精査する必要がある。特に、研究目的 [2] との関連で、個々の上演実態について、学術研究と受容・上演との関連が常に調査されなければならない。下に提示する研究目的 [2] については、西洋における Fenollosa 以降の古代ギリシア・ローマ演劇の研究・上演の相互関係

の実態について、上記 [1] と同様の諸点、すなわち、既存の古代ギリシア・ローマ演劇作品に関する研究、翻訳、翻案、上演データを利用しながら、これらの受容活動が、何時、何処で、誰によっ て、何のために、どのような方法で行われたのかを、特にアカデミズムの動向との関連において調査 することによって、西洋における古代ギリシア・ローマ演劇受容に関する研究活動と上演活動の相互関係の詳細を明らかにする。また、オックスフォード大学古典学部に APGRD が具体的にどのような 経緯によって設立されたかを明らかにする。下に提示する研究目的 [3] との関連では、研究目的 [1] に関する事前調査に基づき、我々は現時点での作業仮説として、近現代日本における演劇研究と上演の歴史を、研究と受容・上演の両面が次第に乖離していった 過程とみなすことが出来ると考えている。また、我々は、上記の [1] 日本における実態調査の成果、及び [2] 西洋における演劇研究と受容・上演の実態の調査から得られた成果を相互に比較しながら、日本におけるこの乖離の原因を解明すると共に、特に大学で行われる(我々の場合は古代ギリシア・ロー マ)演劇研究と日本における今後の古代ギリシア・ローマ演劇の研究と受容・上演の望むべきあり方を、それらの両方面に関して示唆し得ると考えた。

２．研究の目的

上述の研究開始当初の背景から導かれた本研究の目的は、以下の通りである。[1] 近現代日本における古代ギリシア・ローマ演劇受容(翻訳、翻案、上演)の網羅的調査を行い、古代ギリシア・ローマ演劇受容に関する国際共同研究の欠落を補完すると共に、[2]西洋における日本の伝統劇(能、歌舞伎等)の研究と受容が、西洋における古代ギリシア・ローマ演劇の研究と受容に与えた影響を明らかにすることである。そして、[3] これらを通じて、古代ギリシア・ローマ演劇の研究と受容に関して、西洋における受容研究と上演研究の相補的な展開に対して、我が国では、当初は相補的に行われた研究と上演がその後乖離するに至った原因を究明し、我が国における古代ギリシア・ローマ演劇の学術研究と演劇上演の今後の望ましいあり方を示唆すること。

３．研究の方法

データベースについては担当者が順次登録を進めた。毎年夏季に少なくとも 2 名が渡欧し研究報告を行い、海外の研究者と情報・意見交換を行った。 H31 年度夏季休暇中に Oxford 大学の施設内で国際シンポジウム "Symposium : Comparative Studies of Drama and Lyric Poetry in Ancient Greece, Rome and Medieval and Modern Japan"を開催し、研究代表者と研究分担者、および研究協力者たちは研究成果の発表を行った。

【研究体制】

野津(研究代表者):研究全体の総括。近現代日本における上演記録の作成。データベース制作。葛西(研究分担者):近現代西洋における日本伝統演劇の受容から APGRD 設立に至る経緯の調査。欧米全体における日本伝統演劇と古代演劇の受容の調査。 納富(研究分担者):近現代西洋における日本伝統演劇の受容から APGRD 設立に至る経緯の調査。欧米全体における日本伝統演劇と古代演劇の受容の調査。 吉川(研究分担者):近現代日本における上演記録の作成。データベース制作。HP 編集。APGRD デー タベースとの連結作業。APGRD データベースとの連結作業。

上記の通り、H31 年度の夏季休暇中には、Oxford 大学古典学部において、François Lissarrague 氏(ESHSS 教授)や Adele Scafuro 氏(Brown 大学教授)等と共に研究報告と学術交流のための国際シンポジウムを開催し、我々の研究成果発表と研究経過報告を行ったが、その際、上記欧米の研究協力たち並びにその他の招待研究者及び上演者たちによる講演会を開催し、欧米の研究者たちとの学術交流を促進した。また、本研究による実態調査の具体的な成果は HP に公開する準備を進めると共に、直接 APGRD のデータベースにインテグレートされ、直ちに公開されることを目指す。

Fenollosa は、日本の伝統芸能である「能」に強く惹かれ、その翻訳にも取り組んだ。Fenollosa の遺稿をもとに詩人 E.Pound が「能」作品の英訳を完成し、その影響は、たとえば W. B. Yeats の劇「鷹の井戸」へと展開する(この劇は後に新作能として日本に 還流する)。Pound もまた、後年ギリシア悲劇『トラキスの女たち』を翻案し、能の形式で上演されることを望んだ。この流れの一つの契機として、Fenollosa が西洋へ「能」を紹介したことは重要であるが、彼がギリシア演劇と「能」の歴史的文化的関連性について述べるなど(1903 年のワシントンでの 講義)、おそらく自身の東洋美術研究もふまえて、当時として独自の見解を表明している点も注目に値する。彼は能の「上演」に大きな意義を見出したが、彼の示す能とギリシア演劇の関係性をふまえると、能の「上演」への眼差しは、古代ギリシア演劇の「上演」に対する意識の裏返しであろう。

「能」の英訳を完成した Pound は、その後、Catullus を英訳している。おもしろいことに、J. Gould 氏 は、学生時代の P. Parsons 氏(後の Oxford 大学欽定ギリシア語教授)に、Oxford Philological Society での Pound 訳 Catullus に関する報告を聞きに行かせており、早い時期から Pound に関心を持って いた可能性もある。彼は The Cambridge History of Classical Literature, I Greek Literature, 1985, pp.263-281 において、ギリシア悲劇をその上演形態から総合的に考察する必要性と方法論を提示したが、その学問的後継者である O.Taplin 氏(Oxford 大学教授)によって同大学に APGRD が設立されるに及び、ギリシア演劇上演の比較的・総合的研究の土台が形成されて今日に至る。

我々は、このようにして、Fenollosa の活動から APGRD 設立に至るまで、西洋における古代ギリシア演劇研究には連続性があり、具体的な上演(舞台運営、音楽、ダンス等を含む総合的芸術)及び社会的 なコンテクスト(宗教、儀礼、政治、法制史等を含む共同体全体)の理解と不可分の関係を保ちながら推進されたが、日本における古代ギリシア演劇研究はそうした上演と社会

的コンテクストの理解をどちらかというと捨象する形で専門化していったという仮説を立てた。
【平成 29 年度】
すでに 3 年間に渡り東京大学大学院人文社会系研究科「多分野交流セミナー」を利用して、研究代表者と研究分担者は、明治以降の日本における西洋古典受容に関して調査を進め、上記の認識を共有するに至った。H29 年度以降は、研究対象を古代ギリシア・ローマ演劇の研究と受容に特化して、研究発表を行うことになった。研究代表者と研究分担者たちとの間で、各部門(研究目 的 [1]-[3])の研究担当者が頻繁に、相互に研究の成果と経過を確認し合うと共に、情報・意見交換を行った。データベースについては担当者が順次登録を進めた。
H29 年度の夏季に、研究代表者と研究分担者 2 名が渡欧し、渡航先で研究報告を行い、海外の研究者と情報・意見交換を行った。近現代日本における上演記録作成の担当者 2 名(野津・吉川)は、H29 年度内に、我々以前の日本人研究者たちによって蓄積された上演データ集積の成果を批判的に継承しつつ、不足部分を見極め、補完作業を開始した。
【平成 30 年度】
H30 年度の夏季休暇までに、近現代西洋における日本伝統演劇の受容から APGRD 設立に至る歴史を調査する担当者 (葛西)は、文献調査を行った。この文献 調査に基づき、我々の作業仮説の検証を始めた。
【平成 31 年度】
H31 年度の夏季休暇中に Oxford 大学古典学部内で国際シンポジウムを開催し、 研究代表者と研究分担者は研究成果を発表した。同シンポジウムには、主に英国で活躍する同領域の研究者と上演者たちも参加すると共に、François Lissarrague 氏や Adele Scafuro 氏等の欧米の研究協力者たちも講演者として担当部門の調査結果を発表した。同シンポジウムの発表内容と研究成果は、いくつかの媒体で公開された。近現代日本における上演記録の作成の担当者 2 名は、前年度に見極めた近代日本における上演記録の不足部分の補完作業を続けた。

４．研究成果

H 29 年度

5 月 7 日 Scafuro 氏(研究協力者)と野津(研究代表者)は研究協力の一環として SPAC(静岡パーフォーマンス・アート・センター)で『アンティゴネー』を観劇した後、演出家の宮城聰氏のインタビューを行った。夏季休暇中、納富(分担研究者)と野津は渡英しオックスフォードで Scafuro 氏、Lissarrague(研究協力者) 氏等の海外研究者と情報意見交換を行い、研究協力の打ち合わせを行った。8 月 29 日、野津はケンブリッジで研究報告を行った。年度中、吉川(分担研究者)と 野津は日本におけるギリシア悲劇上演記録の補完・連結作業を進め、東大ギリシア悲劇研究会による上演資料の登録の準備を優先して開始したが、11 月 23 日 同研究会の旧メンバーであり資料を保存している細井雄介氏、細井敦子氏の自宅を訪問し、資料収集を行った。本年度の研究総括として、2 月 26 日、科研メンバーを中心に「能楽とギリシア悲劇及びその受容に関する比較研究」と題する公開シンポジウムを信州大学(松本)で行ったが、プログラムは以下の通りであ る:葛西康徳(分担研究者)「テクスト、パフォーマンス、社会 - John Gould のギリシア悲劇研究ー」/ 横山義志(SPAC 文芸部)「タモリはなぜミュージカル が嫌いなのか? ～￥西洋演技理論史における音楽性とアジア的身体～」/ 吉川斉「アーネスト・F・フェノロサと能楽 ―実践、そして翻訳」/野津寛「欧米人の能 楽研究と西洋古典 ― ノエル・ペリーの場合 ―」/松本英実(青山学院大学教授・研究協力者)「比較法学者杉山直治郎と能楽研究」/末吉未来(東京大学博士課 程・研究協力者)「能のミーメーシス:なぜギリシア悲劇と能は「似ている」のか」/中村寿々葉(東京大学博士課程・研究協力者)「演劇と社会ーギリシア悲劇と 夢幻能」。3 月 1 日、研究協力者 A.Scafuro 氏の講演と討論会を東京大学において開催した。
能楽とギリシア悲劇の受容の比較研究推進に当たり、ブラウン大学教授 Scafuro 氏を中心に海外研究協力者たちとの連絡と打ち合わせが順調におこなわれた。同時に、F. Lissarrague 氏及び、H30 年度来日予定だった V. Cassato 氏や M. Pierre 氏との連絡により、この研究プロジェクトに関する国際的なネットワークが形成された。また、SAPC の横山氏(研究協力者)等大学以外の場で研究を進める研究者をシンポジウムに招待することにより、大学の研究者たちと実際の上演にあたる演出家たちとのネットワークも形成された。今年度の研究の総括として行ったシンポジウムでは、葛西(分担研究者)が英国における J.Gould のギリシア演劇研究に関して、横山氏が西洋演劇における音楽とダンスの位置づけに関して、吉川(分担研究者)が Fenollosa の能楽研究に関して、野津(研究代 表者)がノエル・ペリーの能楽研究に関して、今年度の研究の総括を行い、この部門での研究の進行も順調であることが確認された。ギリシア悲劇の日本における上演のデータベース作成の関連では、1950 年代に始まりほぼ 10 年間続いた東京大学ギリシア悲劇研究会の上演記録と資料収集が目下の最重要課題であること が理解されたので、資料の所有者の方と直接コンタクトを取りながらこれを最優先に進めた。

H 30 年度

6 月 4 日，信州大学(松本)にて，Scafuro 氏，Pierre 氏，Cazzato 氏を招聘し，第 2 回シンポジウムを英語で開催した。6 月 13 日，日仏会館にて，Pierre 氏による講演会 "「合唱」と「コロス」:両者は比較不可能か" を日仏会館の協賛により開催した。夏季休暇中， 葛西(研究分担者)と野津(研究代表者)は渡英し，オックスフォードにて上記の海外研究協力者達と情報・意見交換， 研究協力の打ち合わせを行った。吉川(研究分担者)と野津は， 東大ギリシア悲劇研究会の上演資料登録の準備を続け，資料所有者の方から，同研究会の未公開資料を本科研 HP で体系

的にデジタル化・公開することを正式に許可して頂くに至った。2 月 25 日，東京大学(本郷)にて，公開シンポジウム Comparative Studies on Greek, Roman and Japanese Theatre and Lyric Poetry を英語で開催した。研究発表題目は以下の通り:Yasunori Kasai, 'Karl Meuli on Mask' / Miku Sueyoshi, ‘History of Tragic Studies in Japan: Irresistible Attraction between Tragedy and Noh’ / Suzuha Nakamura, 'Reconstructed Noh: Westernization as a National Goal'. / Yoshiji Yokoyama, 'The Status of Actors in Ancient Rome, in France and in Japan — Around the Notion of Grace of Acting ’ / Hitoshi Yoshikawa, ‘Ernest F. Fenollosa and Noh: On his Experience’. / Hiroshi Notsu, 'Fixed Structures of Greek Tragedy and Comedy: are they Comparable to Those of Japanese Lyric Drama Noh?'. / Emi Matsumoto, 'Sugiyama Naojiro's Introduction to Peri's Noh'. / Vanessa Cazzato, 'Some Reflections on Greek Lyric and Japanese Noh'.

能楽とギリシア悲劇の受容の比較研究推進については，前年度同様，海外研究協力者たちとの連絡と打ち合わせ，研究会の共同開催が順調に進められたが，H30 年度も，A. Scafuro 氏，V. Cassato 氏，M. Pierre 氏が実際に来日し，共同研究を進めることができ，本研究の国際的な協力関係がより確実なものとなった。A.Scafuro 氏と野津(研究代表者)は上記の研究協力の成果として、国際研究雑誌に、宮城聰氏によるアンティゴネー上演に関する論文を発表した。また、SAPC の 横山氏(研究協力者)等大学以外の場で研究を進める研究者をシンポジウムに招待することにより，大学の研究者たちと実際の上演活動にあたる実践者たちとのネットワークも継続した。H30 年度の研究の総括として，2 月 25 日に開催したシンポジウムでは，葛西(研究分担者)が K.モイリーと仮面に関して，横山氏が西洋と日本の演劇における俳優の地位に関する比較に関して，吉川(研究分担者)が Fenollosa の能楽研究に関して，野津(研究代 表者)が能楽と古代演劇の形式の比較の可能性に関して，それぞれ今年度の研究の総括を行い，この部門での研究の進行も順調であることが確認された。ギリシア悲劇の日本における上演記録のデータベース作成に関して目下最重要課題とみなされた東京大学ギリシア悲劇研究会の上演記録と資料収集については，資料の所有者の方と直接コンタクトを取りながらこれを最優先に進めた。なお，今年度に招聘を希望していた F. Macintosh 氏の来日は実現することが出来なかった。

R1(H31)年度

吉川(研究分担者)は、調査によって発見した東大ギリシア悲劇研究会の資料について、順次デジタル化を試行しつつ、今後に向けた手法を確立した。また、19 世紀以来の欧米人による能受容において重要な役割を果たした E. Fenollosa について、日本における彼と能の関わりを研究した。葛西(研究分担者)は一貫して儀礼論の立場からギリシア悲劇と日本の伝統演劇(能)の受容の問題を追求すると共に、海外の研究協力との共同研究を推進した。野津(研究代表者)は欧米人による能研究のパイオニア N. Peri の研究、能とギリシア悲劇の儀礼的な構造の比較研究、及び宮城聰のアンティゴネー上演に関する研究を行った。2019 年 3 月、野津(研究代表者)はブラウン大学教授 Adele Scafuro 氏(研究協力者)と共に以下の論文を刊行した:"Miyagi’s Antigones, Three Productions: Tokyo 2004, SPAC May 2017, and Avignon July 2017," Studies in Honour of Guido Avezzu, Skenne; Studies I-1, p. 881-922. 葛西と野津は 2019 年 8 月オックスフォード大学内の古典学部にて国際シンポジウム "Symposium : Comparative Studies of Drama and Lyric Poetry in Ancient Greece, Rome and Medieval and Modern Japan"を開催した。同シンポジウムの発表題目は以下の通り:1. Y. KASAI, "Why are Japanese Scholars of both Japanese and Western Classical Literature Unable to Pursue Comparative studies?” 2. Vanessa CAZZATO, “Noh and Greek Lyric” 3. H. NOTSU, "Fixed Structures of Ancient Greek Theatre and Japanese Lyric Drama No;" 4. M. PIERRE,"Un recit venu d’ailleurs : comparaison entre le recit de l’acteur d’ aikyogen dans le no; et le recit du messager des tragedies de Seneque".

能楽とギリシア悲劇の受容の比較研究推進についてはブラウン大学教授 Scafuro 氏、Vanessa Cazzato 氏、Maxime Pierre 氏との協力関係を中心に、海外研究協力 者たちとの共同研究が順調に進行した。同時に、F. Lissarrague 氏及び、2021 年来日予定であった V. Cassato 氏や M. Pierre 氏との緊密な連携関係により、この 研究プロジェクトに関する国際的なネットワークが益々安定したものになり、具体的な成果が生まれた。ギリシア悲劇の日本における上演のデータベース作成の関連では、1958 年に始まりほぼ 10 年間続いた東京大学ギリシア悲劇研究会の上演記録と資料収集が目下の最重要課題であることが理解されたので、資料の所有者の方と直接コンタクトを取りながらこれを最優先に進めた。これについても順調に進展した。国際シンポジウムの開催を通じ、海外の研究者とのネットワークづくりと意見交換が順調に進行したことが、すでに国際共著論文等の刊行として結実している。しかしながら、本研究の主要部分をなす「近現代日本における上演記録の作成」に関しては、当初の近代日本における上演記録の不足部分の補完作業を終え、英語訳を開始するというゴールにいまだ到達していない。最終年度において、近現代日本における上演記録の作成を完了し、期間内に集積することが出来た上演データの英語訳と、APGRD のデータベースとの連結作業を完成させるという予定であったが、これについてもまだ実現出来ていない。これら未完了の作業については、2020 年度より始まる研究計画へ持ち越すことになった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計19件（うち査読付論文　15件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 野津寛	４．巻 1
２．論文標題 Fixed Structures of Noh compared to Those of Greek Theatre	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『東京大学草創期とその周辺：2014-2018年度多分野交流演習「東京大学草創期の授業再現」報告集』	６．最初と最後の頁 158-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Adele Scafuro, Hiroshi Notsu	４．巻 1-1
２．論文標題 Miyagi’s Antigones, Three Productions: Tokyo 2004, SPAC May 2017, and Avignon July 2017	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Studies in Honour of Guido Avezzu, Skene Studies	６．最初と最後の頁 881-922
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 吉川斉	４．巻 51
２．論文標題 19世紀英国における翻訳イソップ集に関する一考察――「蛙と牛」にみる母蛙の怒りを中心として	５．発行年 2019年
３．雑誌名 津田塾大学紀要	６．最初と最後の頁 273-295
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 納富信留	４．巻 14
２．論文標題 アリストテレスのプラトン「イデア論」規定 ―『形而上学』A6，987b7-10再考―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 フィロロギカ ―古典文献学のために	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Noburu NOTOMI	4．巻 なし
2．論文標題 “Imagination for Philosophical Exercise in Plato’s Republic: The Story of Gyges’ Ring and the Simile of the Sun”, Psychology and Ontology in Plato, Luca Pitteloud and Evan Keeling eds.	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Psychology and Ontology in Plato, Luca Pitteloud and Evan Keeling eds.	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Noburu NOTOMI	4．巻 なし
2．論文標題 “The Soul and Forms in Plato’s Phaedo”	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Plato’s Phaedo: Selected Papers from the Eleventh Symposium Platonicum, Gabriele Cornelli, Thomas M. Robinson, and Francisco Bravo eds., Academia Verlag	6．最初と最後の頁 288-293
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Noburu NOTOMI	4．巻 なし
2．論文標題 “Epistemology in the Sophists”	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Knowledge in Ancient Philosophy, The Philosophy of Knowledge: A History, Volume I, Nicholas D. Smith ed., Bloomsbury Academic	6．最初と最後の頁 49-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉川斉	4．巻 51
2．論文標題 「19世紀英国における翻訳イソップ集に関する一考察――「蛙と牛」にみる母蛙の怒りを中心として」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『津田塾大学紀要』	6．最初と最後の頁 273-295
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 葛西康徳	4．巻 なし
2．論文標題 「プラトンと職業―『ゴルギアス』」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 小島毅編『知の古典は誘惑する』岩波書店岩波ジュニア新書	6．最初と最後の頁 127-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 葛西康徳	4．巻 68
2．論文標題 書評・粟辻悠「古代レトリック再考（一）――ローマ世界における法廷実践の観点から――」（『法学論集』(関西大学)六六－四）、同「古代レトリック再考（二）――ローマ世界における法廷実践の観点から――」（『同前』六七－一）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 法制史研究	6．最初と最後の頁 327-331
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 葛西康徳	4．巻 51
2．論文標題 「古代ギリシア教に改宗することはできるか」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 青山学院大学文学部『史友』	6．最初と最後の頁 27-52頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Hiroshi NOTSU	4．巻 6
2．論文標題 "Embedded Tales and the Story of Lucius: Psyche-Charite-Lucius and Other Parallel Narratives",	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『信州大学人文科学論集』	6．最初と最後の頁 123-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Hiroshi NOTSU (Adele Scafuro 氏と共著)	4．巻 なし
2．論文標題 "Miyagi’s Antigones, Three Productions: Tokyo 2004, SPAC May 2017, and Avignon July 2017"	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Συναγωνζεσθαι, Studies in Honour of Guido Avezzu, Skene; Studies I-1 (ed. Silvia Bigliazzi etc.),	6．最初と最後の頁 881-922
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Hiroshi NOTSU	4．巻 なし
2．論文標題 "Fixed Structures of Noh compared to Those of Greek Theatre"	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『東京大学草創期とその周辺：2014-2018年度多分野交流演習「東京大学草創期の授業再現」報告集』	6．最初と最後の頁 158-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 納富信留	4．巻 66
2．論文標題 伝プラトン著『第七書簡』の再検討 ―前四世紀の書簡文学から―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 西洋古典学研究	6．最初と最後の頁 23-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 納富信留	4．巻 12
2．論文標題 プラトン『ポリテイア』I.334d-eのポレマルコス論駁	5．発行年 2017年
3．雑誌名 フィロロギカ	6．最初と最後の頁 53-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 納富信留	4．巻 68
2．論文標題 始まりを問う哲学史 ―複眼的ギリシア哲学史の試み―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 哲学	6．最初と最後の頁 45-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 野津寛	4．巻 5
2．論文標題 A Re-Examination of the Prologue Speaker Problem in Apuleius' Metamorphoses	5．発行年 2018年
3．雑誌名 信州大学人文科学論集	6．最初と最後の頁 85-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉川斉	4．巻 10
2．論文標題 1505年アルドゥス刊行イソップ集におけるラテン語翻訳について ― quae ante tralata habebantur, infida admodum erant ―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 東京大学西洋古典学研究室紀要	6．最初と最後の頁 35-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計25件（うち招待講演　1件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 Yasunori Kasai [Vanessa Cazzato氏と共同発表]
2．発表標題 On Experiencing Japanese No and Thinking About Greek Lyric
3．学会等名 2019年2月8日，東京大学ヒューマニティーズセンター 第7回オープンセミナー（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Hitoshi Yoshikawa
２．発表標題 Ernest F. Fenollosa and Noh: On his experience
３．学会等名 シンポジウム「ギリシア・ローマ・日本の演劇と抒情詩に関する比較研究」（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hiroshi Notsu
２．発表標題 Fixed Structures of Ancient Greek Theatre, are They Comparable to Those of Japanese Lyric Drama Noh?
３．学会等名 Comparative Studies on Greek, Roman and Japanese Theatre and Lyric Poetry（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yasunori Kasai
２．発表標題 Why are Japanese Scholars of both Japanese and Western Classical Literature Unable to Pursue Comparative studies?
３．学会等名 Symposium : Comparative Studies of Drama and Lyric Poetry in Ancient Greece, Rome and Medieval and Modern Japan（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hiroshi Notsu
２．発表標題 Fixed Structures of Ancient Greek Theatre and Japanese Lyric Drama No
３．学会等名 Symposium : Comparative Studies of Drama and Lyric Poetry in Ancient Greece, Rome and Medieval and Modern Japan（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 納富信留
２．発表標題 「哲学の普遍性」
３．学会等名 第5回東京大学・全南大学哲学科学術交流シンポジウム
４．発表年 2019年

１．発表者名 納富信留
２．発表標題 「アリストテレスのプラトン「イデア論」規定再考 ―『形而上学』A6，987b7-10―」
３．学会等名 第17回フィロロギカ研究集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 納富信留
２．発表標題 「ハイデガーとプラトンの対決」
３．学会等名 ハイデガー・フォーラム第13回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Noburu NOTOMI
２．発表標題 “Thinking of the Ideas from the East”
３．学会等名 4th Conference on Contemporary Philosophy in East Asia (CCPEA2018)
４．発表年 2018年

１．発表者名 Noburu NOTOMI
２．発表標題 “How Modern Japanese People Read Plato’s Politeia”
３．学会等名 International Symposium: Plato, his Dialogues and Legacy
４．発表年 2018年

１．発表者名 Noburu NOTOMI
２．発表標題 “Thinking of the Ideas from the East”
３．学会等名 International Conference: Plato’s Philosophy in Interdisciplinary Context
４．発表年 2018年

１．発表者名 Noburu NOTOMI
２．発表標題 “Why Soul Matters: Reconsidering the Philosophical Contexts of Plato’s On Soul”
３．学会等名 Forming the Soul: Plato and his Opponents - 2nd Asia Regional Meeting of the IPS
４．発表年 2018年

１．発表者名 吉川斉
２．発表標題 「Sur la varite des fables d'Esope en francais ― tradition et originalite（フランス語で書かれた様々な『イソップ寓話』について ― 伝統とオリジナリティー）」
３．学会等名 日仏ギリシャ・ローマ学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hitoshi YOSHIKAWA
２．発表標題 「Ernest F. Fenollosa and Noh: On his experience」
３．学会等名 シンポジウム「ギリシア・ローマ・日本の演劇と抒情詩に関する比較研究」
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hiroshi NOTSU
２．発表標題 " Fixed Structures of Ancient Greek Theatre, Are They Comparable to Those of Japanese Lyric Drama Noh?"
３．学会等名 シンポジウム「ギリシア・ローマ・日本の演劇と抒情詩に関する比較研究」
４．発表年 2018年

１．発表者名 野津寛
２．発表標題 "欧米人の能楽研究と西洋古典 ― ノエル・ペリーの場合 ―"
３．学会等名 シンポジウム「能楽とギリシア悲劇及びその受容に関する比較研究（第１回）」
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hiroshi NOTSU
２．発表標題 "Noel Peri's Studies of Japanese Theatre Noh ― in Search of Rigid Structure"
３．学会等名 国際シンポジウム Comparative Studies of Japanese and Greek Theatre and of Their Reception
４．発表年 2018年

１．発表者名 Noburu Notomi
２．発表標題 Mouvance?: An open tradition of Protagoras’ On Gods
３．学会等名 The International Protagoras Network Workshop（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 納富信留
２．発表標題 哲学とは何か
３．学会等名 哲学会第56回研究発表大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 納富信留
２．発表標題 伝プラトン著『第七書簡』の再検討 ―前四世紀の書簡文学から―
３．学会等名 日本西洋古典学会第68回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 納富信留
２．発表標題 始まりを問う哲学史 ―複眼的ギリシア哲学史への試み
３．学会等名 日本哲学会第76回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 吉川斉
２．発表標題 アーネスト・F・フェノロサと能楽――実践、そして翻訳
３．学会等名 能楽とギリシア悲劇及びその受容に関する比較研究
４．発表年 2018年

１．発表者名 野津寛
２．発表標題 欧米人の能楽研究と西洋古典 ― ノエル・ペリーの場合 ―
３．学会等名 能楽とギリシア悲劇及びその受容に関する比較研究
４．発表年 2018年

１．発表者名 Hiroshi Notsu
２．発表標題 A Re-Examination of the Prologue Speaker Problem in Apuleius’ Metamorphoses
３．学会等名 Cambridge Law and Classics Seminar, At Pembroke College Hosted by Dr. Renaud Gagne (Fellow of Pembroke College)
４．発表年 2017年

１．発表者名 葛西康徳
２．発表標題 テクスト、パフォーマンス、社会 ―John Gould のギリシア悲劇研究―
３．学会等名 能楽とギリシア悲劇及びその受容に関する比較研究
４．発表年 2018年

〔図書〕　計4件

1．著者名 納富信留・檜垣立哉・柏端達也編著	4．発行年 2019年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 vi ＋ 226頁
3．書名 『よくわかる哲学・思想』	

1．著者名 納富信留	4．発行年 2019年
2．出版社 光文社古典新訳文庫	5．総ページ数 330頁
3．書名 プラトン『パイドン』訳・解説	

1．著者名 納富信留	4．発行年 2017年
2．出版社 筑摩書房	5．総ページ数 368
3．書名 哲学の誕生 ―ソクラテスとは何者か―	

1．著者名 納富信留、土橋茂樹、樋笠勝士、上枝美典、神崎忠昭、遠山公一、谷寿美、香田芳樹、野元晋、藁谷敏晴、山内志朗	4．発行年 2018年
2．出版社 慶應義塾大学出版会	5．総ページ数 288（5～25）
3．書名 光の形而上学 ―知ることの根源を辿って―	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	納富　信留 (Notomi Noburu) (50294848)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授 (12601)	
研究分担者	吉川　斉 (Yoshikawa Hitoshi) (60773851)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・助教 (12601)	
研究分担者	葛西　康徳 (Kasai Yasunori) (80114437)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・準研究員 (12601)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計3件

国際研究集会 Symposium : Comparative Studies of Drama and Lyric Poetry in Ancient Greece, Rome and Medieval and Modern Japan	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 Comparative Studies of Japanese and Greek Theatre and, of Their Reception	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 Comparative Studies on Greek, Roman and Japanese Theatre and Lyric Poetry	開催年 2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関